最近の5か年間における口腔腫瘍の臨床的観察

—口腔悪性腫瘍について—

九州歯科大学口腔外科学第2講座 (主任: 梶山 稔教授)

梶 山 稔・黒 川 英 雄・飯 野 悦 朗
中 尾 元 彦・清 水 恵 太・大 坪 充 寛
山 中 富士夫・岸 本 卓

昭和59年2月7日受付

本論文の要旨は第1回口腔腫瘍懇話会(昭和58年1月, 大分市)において発表した.

A Clinical Analysis of the Oral Neoplasms in Our Clinic during the Past 5 Years — Malignant Tumors in Oral Cavity —

Minoru Kajiyama, Hideo Kurokawa, Etsuro Iino, Motohiko Nakao,
Keita Shimizu, Mitsuhiro Otubo, Fujio Yamanaka and Suguru Kishimoto
Second Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Minoru Kajiyama)
Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

The movement of 83 cases diagnosed as malignant tumors in the Second Department of Oral Surgery, Kyushu Dental College Hospital, during the period from 1978 to 1982, were clinically analysed.

The following results were obtained.

1) A series of 83 cases of malignant tumors in oral cavity has been reported. Its incidence was seen in 1.1% of outpatients, in 8.5% of inpatients and in 40.5% of the patients with oral neoplasm. Through the period from 1973 to 1982, there was increasing in number.

2) The malignant tumor in the majority of 83 cases was located on the tongue (27.7%), but occurred with lesser frequency on the gingiva of the mandible (19.3%), the gingiva of the maxilla (16.9%), the hard palate (16.9%), the floor of the mouth (9.6%), the buccal mucosa (7.2%), the lip and the submandibular region (1.2%). Through the period from 1973 to 1982, there was decreasing in number in the gingiva of the maxilla, but there was increasing in number in the gingiva of the mandible and the buccal mucosa.

3) Of the malignant tumors (83 cases), 43 cases (51.8%) were between 50 and 60 years of age (the average 60.2 years). However, during the period from 1973 to 1977, the average was 63.0 years.

4) As to the incidence by sex, the incidence of malignant tumors was slightly higher in males. Through the period from 1973 to 1982, there was no change in the movement.

5) This series was found histopathologically to be; carcinoma was 90.4%, sarcoma was 4.8% and malignant melanoma was 4.8%.

Of the carcinoma (75 cases), squamous cell carcinoma was 81.3%, mucoepidermoid carcinoma was 5.3%, adenoid cystic carcinoma was 4.0%, carcinoma simplex was 2.7% and *adeno carcinoma* was 1.3%.

Key words : *Malignant tumor / Oral cavity / Clinical significance*

緒 言

顎・口腔領域における悪性腫瘍については、これまでに臨床的、病理組織学的な面から多数の報告がみられ、手術法、化学療法、放射線療法、予後などについても種々と検討が加えられ、その進歩は著しい^{1~11)}。しかしながら、今日なお、治療法の確立をみないのが現状である。われわれもこれまでに、教室における口腔腫瘍例について臨床的な検討を行い、その一部は報告した^{12~16)}。以後、悪性腫瘍患者の資料を整理、検討することにより、今後における治療成績の向上を図る糧とすべく調査を行っていたが、今回は悪性腫瘍患者の動態についての調査成績を報告する。

調 査 対 象

1978年から1982年までの最近5か年間に、九州歯科大学第2口腔外科を受診した外来患者総数は7,332名で、口腔腫瘍患者は205名(2.8%)であった。そのうち、良性腫瘍患者は122名(1.7%)で、悪性腫瘍患者が83名(1.1%)であった。今回はこの悪性腫瘍患者・83名、83症例を調査の対象とした。なお、一部の資料では1973年から1977年までの過去5か年間ににおける悪性腫瘍例を追加し、あわせて最近における10か年間とし、悪性腫瘍

図・1 調査対象 1978年～1982年(5か年間)

外来患者総数	7332名		
入院患者総数	974名		
口腔腫瘍患者数	205名	(2.8%, 21.1%)	
良性腫瘍	122例	・	* 悪性腫瘍 83例
外来患者総数	1.7%	・	1.1%
入院患者総数	12.5%	・	8.6%
口腔腫瘍	59.5%	・	40.5%

患者の動態について調査を行った(図・1)。

調 査 成 績

1. 口腔疾患に対する悪性腫瘍の頻度について

口腔領域における悪性腫瘍・83例は外来患者総数・7,332名のわずか1.1%であったが、この間処置を受けた口腔腫瘍・205例(2.8%)のうち、良性腫瘍は122例(59.5%)、悪性腫瘍が83例(40.5%)で、口腔腫瘍のなかでは1/2以上を占める高い頻度であった。また、入院患者総数・974名からみると8.5%であった。一方、最近5か年間に行った各種疾患の病理組織検査成績¹⁶⁾からみると、悪性腫瘍と診断されたものは組織検査数・616例のうち、13.5%を占めていた(図・2)。

図・2 最近5か年間ににおける組織検査からみた諸種疾患について (1978～1982, 616例)

2. 外来患者数に対する口腔腫瘍患者の動態について
最近5か年間(1978～1982)に当科を受診し、加療を

受けた外来患者の総数は7,332名で、毎年1,200～1,600名程度となり、年平均1,466名であった。これらの症例のうち悪性腫瘍は毎年13例から20例に、すなわち外来患者の1%内外を占め、年度別でも大きな変動はなく、年次的にも特定の傾向は認められなかった。また、良性腫瘍では1980年度の35例を除き、他の年度は20～24例程度で、年次的には1.5%内外の増減がみられたものの、特別な傾向はみられなかった。（図・3）。

図・3 最近5か年間ににおける外来患者数に対する口腔腫瘍患者の推移（1978～1982, 205例）

3. 入院患者数に対する口腔腫瘍患者の動態について
1973年から1982年までの最近の10年間ににおける入院患者数に対する口腔腫瘍疾患の動態について調査した。その結果、悪性腫瘍患者は各年度で4.7%から10.9%となり、年平均7.6%であった。そのうち、1979年から1982年にかけては6.3%から10.9%とその頻度は高くなり、

図・4 入院患総数に対する口腔腫瘍患者の推移（1973～1982, 289例）

悪性腫瘍に増加傾向がみられた。これに反し、良性腫瘍では、1980年までは概ね増加の傾向がみられたが、以後は減少の傾向にあった（図・4）。

4. 口腔腫瘍疾患における入院患者の動態について
最近5か年間（1978～1982）に、口腔腫瘍で入院加療を受けた患者の動態について調査した。さらに、1973年からの過去5か年間の調査成績とあわせて、10年間での動態について検討した。その結果、悪性腫瘍は1973年の86.3%をピークとして、概ね減少の傾向にあったが、1981年以後は増加の傾向がみられ、1981年・58.1%、1982年・66.7%となっていた。なお、良性腫瘍ではこれとは逆の傾向にあった（図・5）。ちなみに、地域差を考慮して、これまでに報告された各施設での臨床統計とその動態を比較、検討した。すなわち、国立ガンセンターのような特殊な施設での動態は別としても、関東、沖縄、福岡、北九州で、患者数やその動態に、地域差によると思われる著明な差異や、特別な傾向は認められず、各施設とも外来患者の1%内外となっていた（図・6）。

図・5 口腔腫瘍入院患者の推移（1973～1982, 289例）

図・6 各施設における口腔悪性腫瘍患者の推移について

5. 口腔悪性腫瘍の発現部位とその動態について

最近5か年間(1978~1982)に教室で加療した口腔悪性腫瘍を、発現部位別にその頻度を調査した。すなわち、83例のうち舌が27.7%(23例)と最も多く、以下、下顎・19.3%(16例)、上顎・16.9%(14例)、口蓋・16.9%(14例)、口底・9.6%(8例)、頬・7.2%(6例)、口唇・1.2%(1例)、顎下部・1.2%(1例)の順であった。また、1973年から1982年までの過去10年間にさかのぼって、発現部位別にそれぞれの年次推移について調査してみた。その結果、上顎(歯肉)では1975年の9.1%を除き、概ね徐々に減少する傾向にあった。また、下顎(歯肉)では1977年の37.5%をピークとして1978年以後は徐々に増加の傾向がみられた。一方、口蓋(粘膜)や舌に発現した悪性腫瘍は、ともに1978年までは増加の傾向を示していたが、1979年以後は減少の傾向がみられた。しかしながら、10年前における比率と比べれば、やはり増加していた。頬(粘膜)では、1975年までは6~9%程度にみられ、1977年から1978年までは1例もなく、1979年からは増加の傾向がみられた。また、口底では、1977年までは増加がみられたが、1978年以後は各年度で増加あるいは減少し、年次的にも特別な傾向はみられなかった(表・1、図・7)。

図・7 口腔悪性腫瘍の発現部位と推移について
(1973~1982)

表・1 最近5か年間における口腔悪性腫瘍の

部位別発現頻度 (1978~1982, 83例)

舌	下顎	上顎	口蓋	口底	頬	口唇	顎下
23	16	14	14	8	6	1	1
27.7%	19.3%	16.9%	16.9%	9.6%	7.2%	1.2%	1.2%

例)、口唇・1.2%(1例)、顎下部・1.2%(1例)の順であった。また、1973年から1982年までの過去10年間にさかのぼって、発現部位別にそれぞれの年次推移について調査してみた。その結果、上顎(歯肉)では1975年の9.1%を除き、概ね徐々に減少する傾向にあった。また、下顎(歯肉)では1977年の37.5%をピークとして1978年以後は徐々に増加の傾向がみられた。一方、口蓋(粘膜)や舌に発現した悪性腫瘍は、ともに1978年までは増加の傾向を示していたが、1979年以後は減少の傾向がみられた。しかしながら、10年前における比率と比べれば、やはり増加していた。頬(粘膜)では、1975年までは6~9%程度にみられ、1977年から1978年までは1例もなく、1979年からは増加の傾向がみられた。また、口底では、1977年までは増加がみられたが、1978年以後は各年度で増加あるいは減少し、年次的にも特別な傾向はみられなかった(表・1、図・7)。

6. 口腔悪性腫瘍の発現年齢とその動態について

最近5か年間(1978~1982)における口腔悪性腫瘍患者の年齢別発現頻度を調査した。その結果、7歳から81歳までの幅広い年齢層に発現していたが、60歳代が27.7%(23例)でピークを示し、次いで50歳代・24.1%(20例)、70歳代・19.3%(16例)、40歳代・19.3%(16例)、80歳代以上・3.6%(3例)、30歳代・3.6%(3例)の順で、50歳代から60歳代が51.8%(43例)と約半数例を占め、なかでも、いわゆる癌年齢といわれる40歳以上の症例が90.4%(78例)の高い発現頻度を示していたことは興味深いことである。なお、10年前の5か年間と最近における5か年間での発現年齢分布を比較してみた。10年前における5か年間での平均年齢が63.0歳であったのに対し、最近の5か年間では平均年齢が60.2歳と、やや若年化の傾向にあった(表・2、図・8)。

表・2 最近5か年間における口腔悪性腫瘍の

年齢別発現頻度 (1978~1982, 83例)

0~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80以上
2	3	16	20	23	16	3
2.4%	3.6%	19.3%	24.1%	27.7%	19.3%	3.6%

図. 8 口腔悪性腫瘍患者の年齢別発現頻度について

7. 口腔悪性腫瘍の性別とその動態について

最近の5か年間（1978～1982）における口腔悪性腫瘍患者の性別発現頻度について調査した。その結果、男性が59%（49例）、女性が41%（34例）と男性に多発しており、女性の約1.5倍となっていた。また、1973年から1982年までの過去10か年間での性別による年次推移をみると、1973年から1976年までは男性に多く、1977年、1978年ではその差はなく、1979年より再び男性に多発する傾向がみられた（表・3、図・9）。

表. 3 最近5か年間における口腔悪性腫瘍の性別発現頻度（1978～1982, 83例）

男	女
49	34
59%	41%

図. 9 口腔悪性腫瘍患者の性別発現頻度と推移について

8. 口腔悪性腫瘍の組織型とその動態について

10年前の過去5か年間（1973～1977）と最近の5か年間（1978～1982）における口腔悪性腫瘍の病型について調査した。過去5か年間では、悪性腫瘍・83例のうち癌腫が82例（98.8%）、悪性黒色腫が1例（1.2%）であっ

たのに対し、最近の5か年間では、悪性腫瘍・83例のうち癌腫が75例（90.4%）、肉腫（骨肉腫・2例、線維肉腫・1例、リンパ肉腫・1例）・4例（4.8%）、悪性黒色腫・4例（4.8%）となり、さほどの変動はみられなかった。また、口腔悪性腫瘍の組織型、とくに癌腫では過去5か年間において、82例のうち扁平上皮癌が75例（91.5%）、腺様嚢胞癌・5例（6.1%）、その他・2例（2.4%）であった。これに反し、最近の5か年間では、75例のうち、扁平上皮癌が61例（81.3%）と最も多く、次いで粘表皮癌・4例（5.3%）、腺様嚢胞癌・3例（4%）、単純癌・2例（2.7%）、腺癌・1例（1.3%）、その他・4例（5.4%）となり、10年前の過去5か年間に比べ、最近の5か年間では、悪性腫瘍の組織型がかなり多様化を呈していた（図・10、11）。

図. 10 教室における口腔悪性腫瘍患者の変動

図. 11 口腔悪性腫瘍の組織型の変動

総括ならびに考察

口腔悪性腫瘍に対する治療法はこれまでに多岐にわたる検討が加えられ、種々と改良されてきたが¹⁻¹¹⁾、今日なお適切な治療法の確立をみない。とくに、口腔領域に発現した悪性腫瘍では早期の診断、治療が実施しやすい部位であるにもかかわらず¹⁹⁾、その解剖学的な特殊性⁴⁻⁸⁾から、十分に満足すべき成績を得ていないのが

現状である。したがって、今後における悪性腫瘍の治療をより効果的に実施するうえで、これまでの悪性腫瘍患者の資料を整理し、検討することは有意義なことと考えられる。このような観点から、私たちは1978年から1982年までの最近5か年間に、当科を受診した口腔悪性腫瘍患者・83症例を集計し、調査を行った。また、1973年から1977年までの過去5か年間の悪性腫瘍患者の資料を追加し、あわせて過去10か年間における患者の動態についても検討を加えた。

顎・口腔領域に発現する悪性腫瘍の頻度は低く、全身的な悪性腫瘍からすれば、大谷 (1954)¹⁷⁾ は2～6%、渡辺ら (1960)¹⁸⁾ は3～6%内外とし、鷺津 (1976)¹⁹⁾ は2.6%であったと報告している。このように口腔領域での悪性腫瘍は全身悪性腫瘍のほぼ数%内外を占めているにすぎない。また、口腔外科外来を受診した諸種の疾患患者に対し、渡辺ら (1960)¹⁸⁾ は約1%、佐々木ら (1969)²⁰⁾ は0.78%、また西嶋ら (1975)²¹⁾ は0.8%、村瀬ら (1979)²²⁾ ・0.59%、堂原ら (1979)²³⁾ ・1.18%、山城ら (1983)²⁴⁾ ・1.8%、さらに亀山ら (1983)²⁵⁾ ・0.5%とそれぞれ1%内外の頻度で報告されている。また、入院患者数に対する頻度としては、西嶋ら (1975)²¹⁾ が13.8%、堂原ら (1979)²³⁾ が10.64%であったと報告している。当科では諸種疾患で外来を受診した患者数の1.1%、入院患者数の8.5%にあたり、諸家の報告にほぼ類似した成績であった。

口腔悪性腫瘍の外来患者数に対する年次推移について、鷺津 (1976)¹⁹⁾ は年次推移でわずかながら増加していたとし、村瀬ら (1979)²²⁾ も年度別には発現頻度が漸次高くなっていったと報告している。これに反し、中村ら (1977)²⁶⁾、亀山ら (1983)²⁵⁾ らは年次推移について、明らかな増加あるいは減少の傾向は認められなかったと報告している。当科の調査では、各年度で外来患者数の1%内外となり、入院患者数に対しては4.7%から10.9%で、近年わずかながら増加の傾向にあった。

一方、口腔悪性腫瘍と地域差との関係について、鷺津 (1976)¹⁹⁾ によれば、口腔癌および咽頭癌による死亡は男子が熊本、女子は宮崎で九州地方に集中し、上顎洞癌では北海道に死亡が多かったと報告し、地域差を示唆している。著者らは地域差を考慮してこれまでに報告された各施設^{19, 22, 24, 26)} における口腔悪性腫瘍の動態と当科における動態とを比較してみた。その結果、悪性腫瘍患者数あるいは年次推移に著差はなく、地域差によると思われる特異的な傾向は認められなかった。

口腔腫瘍のうち、悪性腫瘍と良性腫瘍との割合につい

て、小川ら (1971)²⁷⁾ は1:2.3で良性腫瘍が多く、長谷川ら (1974)²⁸⁾ は2.6:1で悪性腫瘍が多かったと報告している。また、坂本ら (1980)²⁹⁾ のように、その差を認めなかったという報告もみられる。当科では、その比率が1:1.5で良性腫瘍がわずかに多く、小川ら (1971)²⁷⁾ の報告に類似するものであった。

発現部位について、一般に舌および歯肉における発現頻度が高いとされている。なお、各医療機関の特殊性あるいは解剖学的な部位の分類などが一定していないため、報告者により発現部位に差がみられるものの、Wynder ら (1957)³⁰⁾、Shedd ら (1968)³¹⁾、Krause (1973)³²⁾ は舌に好発すると記載し、鷺津 (1976)¹⁹⁾ は舌に約60%が発現していたとし、他に中村ら (1977)²⁶⁾ ・56%、北島ら (1978)³³⁾ ・32.9%、村瀬ら (1979)²²⁾ ・34.4%、堂原ら (1979)²³⁾ ・28%、山城ら (1983)²⁴⁾ ・33.9%とそれぞれ舌での多発を報告している。一方、上野ら (1969)⁹⁾ は35.8%、亀山ら (1983)²⁵⁾ ・37%と歯槽歯肉で多かったという報告もみられる。いずれにせよ、舌および歯肉で60～70%と発現頻度が高く、頬、口底、口唇などでは発現頻度が低いようである。

当科では、舌に27.7% (23例)、下顎・19.3% (16例)、上顎・16.9% (14例)、口蓋・16.9% (14例)以下、口底、頬、口唇、顎下の順となり、舌に発現した症例が多かった。また、上・下顎の歯肉には36.2% (30例)が発現していた。したがって、舌および歯肉では63.9%となり、諸家の報告と同様な成績であった。また、発現部位別に過去10か年間の年次推移をみると、上顎でやや減少の傾向がみられたのに対し、下顎や頬部では増加の傾向がみられた。

発現年齢について、諸家の報告を総括すれば^{19, 21-24, 26, 33)}、50歳から60歳代が全体の60%前後を占めていた。ちなみに、癌年齢といわれる40歳以上では90%前後と著しく高くなっていった。当科でも、同様に60歳代で27.7%とピークを示していたが、40歳以上が90.4%を占めていた。また、発現年齢の年次推移について、亀山ら (1983)²⁵⁾ は1970年代以前の報告と比較して、70歳以上の高齢者の占める割合が年次的に増加傾向を示していたと報告している。しかしながら、当科における調査成績では、10年前の過去5か年間の平均年齢が63.0であったのに対し、最近の5か年間では平均年齢が60.2歳とやや若年化の傾向がみられた。この成績は近年、高齢化社会であるにもかかわらず、世間一般における口腔癌への認識の高まりを示唆するもので、比較的早期に受診し、加療を受けたためと考えられる。

性別について、諸外国^{30,34,35)}では男性が女性の4倍から13倍と、男性が圧倒的に多く、本邦でも男性が女性の約2倍の発現頻度を示している^{7,17~20,24,25,30)}。当科でも、男女比は1.5:1と男性に多く、また、年次推移においても、ほぼこの割合で増減していた。

口腔悪性腫瘍のうち、癌腫と肉腫との割合について、諸家の報告からすれば癌腫が圧倒的に多く、肉腫の7~20倍の発現頻度を占めていた^{11,19,25,26,36~38)}。当科でも悪性腫瘍・83例のうち、癌腫が90.4%(75例)、肉腫が4.8%(4例)となり、その比は18.8:1であった。一方、その他の悪性腫瘍をみると、数%内外を占めるとされ、当科でも4.8%と諸家の報告とほぼ同様な成績であった。

癌腫のなかでは扁平上皮癌が大部分を占め、諸家の報告では90%前後で^{11,19,20,22,25,26,33,36)}、他に腺様嚢胞癌、腺癌、粘表皮癌などの腺系癌、単純癌および未分化癌などの報告がみられた^{11,19,33)}。当科でも、扁平上皮癌が81.3%と大多数を占め、次いで、粘表皮癌³⁹⁾・5.3%、腺様嚢胞癌¹⁵⁾・4%、単純癌・2.7%、腺癌¹⁵⁾・1.3%となっていた。一方、肉腫では、渡辺ら(1960)¹⁸⁾が口腔における組織型は様々で、その特異性は決定しがたいと述べている。すなわち、線維肉腫が多いとするもの⁴⁰⁾、さらに紡錘形細胞肉腫が多いとするもの^{24,25)}など、一定していないようである³⁶⁾。当科では、症例数が少なく、その特異性を明確にすることはできなかったが、骨肉腫^{41,42)}・2例、線維肉腫・1例、リンパ肉腫・1例となっていた。また、組織型における年次推移では、10年前の過去5か年間に比べ、最近の5か年間では、組織型がいくぶん多様化を呈していた。

結 語

1978年から1982年までの最近5か年間に当科を受診した口腔腫瘍患者・205名(2.8%)のうち、口腔悪性腫瘍・83症例(40.5%)について臨床的にその動態を調査し

た。また、1973年から1977年までの過去5か年間における口腔悪性腫瘍例の資料を追加し、あわせて過去10か年間における口腔悪性腫瘍例の動態について調査を行い、以下の結果を得た。

1) 1978年から1982年までにおける口腔悪性腫瘍患者は外来患者数の1.1%、入院患者数の8.5%であった。しかしながら、口腔腫瘍患者のなかでは40.5%と高い頻度であった。なお、外来患者数に対する口腔悪性腫瘍患者は最近、増加の傾向にあった。また、口腔悪性腫瘍と地域差との関係について、悪性腫瘍患者数あるいは年次推移に著差はなく、地域によると思われる特異的な傾向は認められなかった。

2) 口腔悪性腫瘍の発現部位については、舌が27.7%で最も多く、以下、下顎・19.3%、上顎・16.9%、口蓋・16.9%、口底・9.6%、頬部・7.2%、口唇および顎下部がそれぞれ1.2%であった。また、1973年から1982年までの過去10年間における年次推移をみると上顎では、やや減少の傾向がみられたが、下顎や頬部では増加の傾向にあった。

3) 口腔悪性腫瘍の発現年齢については、50歳代から60歳代が51.8%を占めていた。また、10年前の過去5か年間の平均年齢が63.0歳であったのに対し、最近5か年間では平均年齢が60.2歳とやや若年化の傾向にあった。

4) 口腔悪性腫瘍の性別では、男性が59%で、女性が41%と男性に多く、女性の約1.5倍であった。また、年次推移をみると、過去10年間でも同様な割合で増減していた。

5) 口腔悪性腫瘍の組織型では、癌腫が90.4%と最も多く、次いで肉腫・4.8%、悪性黒色腫・4.8%であった。また、癌腫・75例では扁平上皮癌が81.3%を占め、つぎに粘表皮癌・5.3%、腺様嚢胞癌・4%、単純癌・2.7%、腺癌・1.3%、その他・5.4%となり、10年前の過去5か年間に比べ、最近の5か年間では組織型がいくぶん多様化を呈していた。

引 用 文 献

- 1) Goldman, L.B.: Cancer and dentist. *J.A.D.A.* 42: 371—382, 1951.
- 2) Paymaster, L.B.: Cancer of the buccal mucosa, A clinical study of 650 cases in Indian patients. *Cancer* 9: 431—436, 1956.
- 3) 清水正嗣: 口腔癌の位相差顕微鏡による細胞学的研究. 日口外誌 5: 19—25, 1959.
- 4) 上野 正・塩田重利・清水正嗣・小谷 朗: 口腔癌の療法と予後に関する研究 第1報 舌癌について. 日口外誌 6: 396—402, 1960.
- 5) 上野 正・大谷隆俊・清水正嗣・小谷 朗: 口腔癌の療法と予後に関する研究 第2報 上顎癌について.

日口外誌 6 : 407—416, 1960.

- 6) 上野 正・岡 達・清水正嗣・小谷 朗・雨宮義弘：口腔癌の療法と予後に関する研究 第3報 下顎癌122例について．口病誌 28 : 432—444, 1961.
- 7) 上野 正・岡 達・清水正嗣・大橋 靖・小谷 朗・雨宮義弘・道 健一：口腔癌の療法と予後に関する研究 第4報 口底癌32例について．日口外誌 9 : 65—69, 1963.
- 8) 上野 正・岡 達・清水正嗣・小谷 朗・道 健一・岡山三郎：口腔癌の療法と予後に関する研究 第5報 口唇および頬粘膜癌40例について．日口外誌 9 : 92—97, 1963.
- 9) 上野 正：口腔癌の治療に関する研究．口病誌 36 : 4—19, 1969.
- 10) 戸塚盛雄：口腔領域悪性腫瘍新鮮例の臨床，組織および細胞学的研究 —とくにその臨床視診型，TNM分類と組織学的所見について—．口病誌 38 : 94—103, 1971.
- 11) 上野 正：口腔癌—最近の研究展望—．20 : 169—175, 1944.
- 12) 重住十成・黒川英雄・銅城将紘・梶山 稔：口腔領域悪性腫瘍に関する臨床的検討．口科誌 32 : 739, 1983.
- 13) 重住十成・黒川英雄・銅城将紘・梶山 稔：口腔領域悪性腫瘍に関する臨床的検討 —舌癌について—．第28回日本口腔外科学会総抄録集 42, 1983.
- 14) 梶山 稔・黒川英雄・辛島光一・重住十成・飯野悦朗・中村憲司・原田英治：最近の5か年間ににおける口腔腫瘍の臨床的観察—血管腫例について—．九州歯会誌 37 : 751—759, 1983.
- 15) 梶山 稔・黒川英雄・飯野悦朗・銅城将紘・三浦正明・上野主博・高田繁己：最近の教室における良性疾患の臨床的観察—とくに Fibrous Dysplasia について—．九州歯会誌 37 : 760—771, 1983.
- 16) 梶山 稔・黒川英雄：最近の5か年間ににおける口腔腫瘍の臨床的観察—唾液腺腫瘍について—．九州歯会誌 37 : 1018—1095, 1983.
- 17) 大谷隆俊：口腔癌の臨床病理学的研究 第3報．口病誌 21 : 93—102, 1954.
- 18) 渡辺義男・小林敏行・河本健行・小林敏郎・真木亮二：わが教室において最近3か年間に経験せる口腔領域の癌腫および肉腫について．日口外誌 6 : 323—330, 1960.
- 19) 鷺津邦雄：口腔癌の現況とその動向（上）—自験例を中心に—．歯界展望 47 : 357—367, 1976.
- 20) 佐々木元賢・千野武広・竹内太刀夫・田中俊彦・竹村 斌：わが教室における顎・口腔領域の悪性腫瘍に関する治療症例の検討．日口外誌 15 : 74—78, 1969.
- 21) 西嶋克巳・石川利広・岸 幹二・山崎邦彦・藤井康博・駒井正昭・長嶋駿一郎・桶口 満・田村淳一・岡本全允・前田健一郎・棕代龍彦・岡本健一郎・石田元久：顎口腔領域の悪性腫瘍に関する研究 第1報 悪性腫瘍患者387例の臨床統計的観察．日口外誌 21 : 316—322, 1975.
- 22) 村瀬博文・玉井達人・関戸幹夫・鈴木和彦・河内四郎・藤田浄秀・増田正樹・大谷隆俊：口腔悪性腫瘍の臨床病理学的研究 第1報 臨床統計的観察．日口外誌 25 : 72—80, 1979.
- 23) 堂原義美・川平清秀・杉原一正・山下佐英：わが教室における過去10年間の顎口腔領域悪性腫瘍の臨床統計的観察．日口外誌 25 : 548—558, 1979.
- 24) 山城正宏・藤井信男・友寄喜樹・本村和弥・金城 孝・仲宗根康雄・儀間 裕・宮里 修・照屋正信：口腔領域悪性腫瘍の臨床病理学的研究 第1報 過去8年間の臨床統計的観察．口科誌 32 : 110—116, 1983.
- 25) 亀山忠光・竹中将純・木村高樹・稗田照雄・大楠道生・朱雀直道・松瀬洋一・森永 太：当教室における過去10年間の悪性腫瘍患者の臨床統計的観察．日口外誌 29 : 1738—1746, 1983.
- 26) 中村社綱・田代英雄・池村邦男・大関 悟・河野泰孝・大部大明：わが教室10年間の口腔癌の臨床統計的観察 —試用期間1974～1977年の TNM 分類にもとづいて—．日口外誌 23 : 533—540, 1977.
- 27) 小川邦明・藤岡幸雄・大橋 靖・関山三郎・工藤啓吾・本間隆義・玉木功一・青村修明：岩手医科大学歯学部口腔外科における外来診療の実態について—特に昭和44年1月より昭和45年5月に至る1年6か月の臨床統計的観察—．日口外誌 17 : 386—391, 1971.

- 28) 長谷川 清・高田和彰・松村智弘・作田正義・右田 武・青葉孝昭：大阪大学歯学部附属病院中央検査病理部門における過去2か年間の臨床病理材料415例の検討．*阪大歯誌* 19：201—204, 1974.
- 29) 坂本忠幸・高木健次・宮田和幸・中西 聡・和田 健・森田展雄・槇野可代二：口腔領域疾患の臨床病理学的検討 第1報 統計的観察．*日口外誌* 26：1007—1010, 1980.
- 30) Wynder, E.L., Bross, I.J. and Feldman, R.M. : A study of the etiological factors in cancer of the mouth. *Cancer* 10 : 1300—1308, 1957.
- 31) Shedd, D.P., Essen, C.F., Counelly, R.R. and Eisenberg, H. : Cancer of the buccal mucosa, palate and gingiva. *Cancer* 21 : 440—452, 1968.
- 32) Krause, C.J. : Carcinoma of the oral cavity. *Arch. Otolaryngol.* 97 : 354—360, 1973.
- 33) 北島晴比古・内田安信・成田令博・西田紘一・松尾敏明・佐藤 充・古内克己・富谷吉二郎・大目 享：当教室における過去10年間の口腔悪性腫瘍の臨床統計的観察．*日口外誌* 24：261—258, 1978.
- 34) Nelson, J.F. : Intraoral carcinoma ; predisposing factors and their frequency of incidence as related to age at onset. *J.A.D.A.* 82 : 564—575, 1971.
- 35) Sigurd, O.K. : Squamous cell carcinoma of the oral soft tissue ; a statistical analysis of 14253 cases by age, sex and race of patients, *J.A.D.A.* 92 : 571—580, 1976.
- 36) 小野史郎：顎口腔領域悪性腫瘍350例について． 5 : 102—118, 1959.
- 37) 筒井英夫：徳島大学医学部附属病院歯科において入院加療した悪性腫瘍患者の統計的観察．*四国医誌* 28 : 511—518, 1972.
- 38) 砂川 元：教室における最近10年間の肉腫の臨床的観察．*日口外誌* 22 : 557—563, 1976.
- 39) 梶山 稔・銅城将紘・黒川英雄・重住十成・林 嘉仁・福山 宏・児玉高盛：口蓋に発現した Mucoepidermoid tumor の1症例．*日口外誌* 26 : 761—766, 1980.
- 40) 石川梧朗：口腔病理学Ⅱ．永末書店，京都，1982，740—751.
- 41) 梶山 稔・黒川英雄・銅城将紘・矢野茂良・有松正豊・中村和行：下顎骨に発現した骨肉腫の1症例．*九州歯会誌* 35 : 252—259, 1981.
- 42) 黒川英雄・重住十成・梶山 稔・福山 宏・上野正康：下顎骨に発現した傍骨性骨肉腫の1例．*口科誌* 32 : 726—727, 1983.